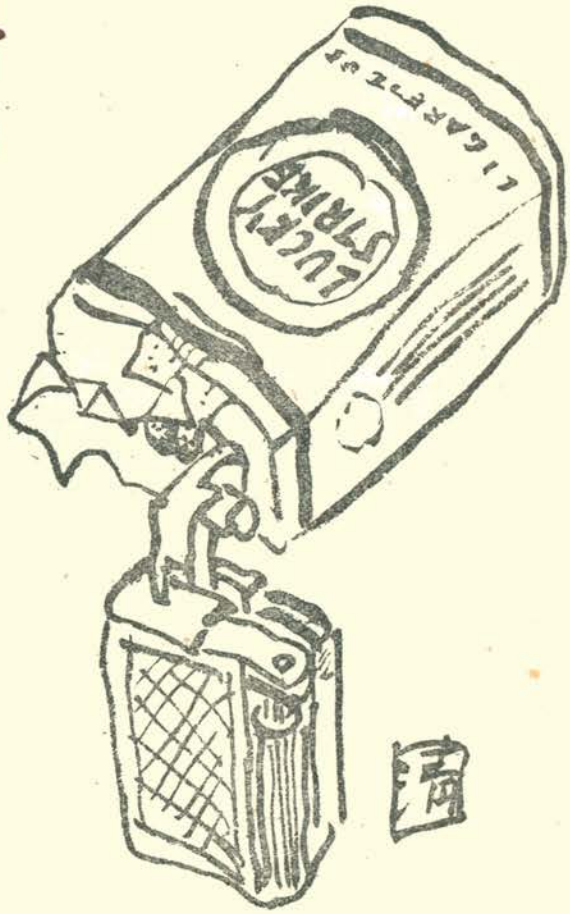
川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿四年十二月一日発行第四卷第十一號
（毎月一回一日發行）創刊大正十三年・通卷二百七十一号



No.271
DEC. 1949

路郎先生を圍んで

川雜姫路支部

一　笑＝いつも先生にお目にかゝるのは大会の席上等で、今日の様な形で先生のお話を伺ふのは今までになかつた事で大変嬉しいと思います。先生はどこの支部へでも氣軽に出かけられますが、海外唯一の支部ハワイより若し招請をうけられたらいらつしやいますか。

路　郎＝えゝ。何時でも行きます。

一　笑＝近い中にあつてよいと思うのですが実現しさうですか。

路　郎＝以前はそんな話もあつたが最近はこちらからゆくと云つても米國や、こちらの政府の許可がないとゆけないので、向うから招請して呉れゝば許可は出るので行くが、経費の問題で向うで負担して呼んで呉れる程、会員全部に熱意があるか如何か……最近日本の名士達が沢山あちらへ行つたがいづれも余り観迎されなかつた様ですね。片山哲が行つて社会党の宣傳をしてお金をかき集めて來た様だが、あちらの邦人達は大分ウンザリしたらしい。それから東本願寺の大谷さんが行つて三弗出せば極樂へ行かせてやると云つたりしたので（笑声）向うの連中閉口しているらしい。会費だけでなくその他のものが附随するので困るのだ。最近で観迎されたのは古橋だ。ドックストをやつて米が來ないで暗い氣持になつている所へ日本が世界新記録を出して一時ホッとした様だ。そんな有様の所へ路郎が又出かけては（笑声）貧乏詩人ではあるし、五弗や三弗で済まぬ、そんな訳で当分望み薄の事と思つている。

一　笑＝しかし近い將來にある事と思ひます。

路　郎＝飛行機で行けば九州へ行く位の日数をつぶせばいゝので行つても好いと思つている。

一　笑＝ハワイ支部の投句には我々想像もつかぬのんびりした句が多い。特殊な支部ですね。生活面の違ひでせうね。

路　郎＝生活面、氣候、温度の差の少い事等ですね。忘年会の写眞を送つて來たら浴衣がけであつた。（笑声）

孤　笑＝常夏ですね。

路　郎＝全く常夏の國。大谷さんがゆかずとも極樂ですよ。（笑声）三十五万の人口の半分が日本人、あとの半分が諸外國人と土着の土人で、邦人が上院議長等にもなつているし日本人として愉快な生活をしているので句もかわつている。ハワイ支部の投句は遠方の人の句でもあるので一句づつでもと思つて採つているが、沒句にも一人一句づゝ批評してエヤーメールで送り返している。勿論沒句であるからほめる句はないが、欠点に就てくわしく批評している向うではそれをプリントにして会員全部に渡している。だん〳〵いゝ句の批評も混ぜてゆきたいが、今の中は欠点の指摘をして二度と失敗をくり返さぬ様にして、その他に特殊な事を少し書いている。一週一回あちらのラヂオで快夢起君が放送している。同君は支部の幹事で東京の人です。短歌、川柳その他色々あるが川柳が最も好評ださうだ。

川柳の放送

燕　子＝四國の四縣で川柳の対抗試合の様な事を放送してゐますね。BKでは川柳の方はやる余地はないのですか。

路　郎＝以前はよくやつたが、プロの編成関係からローカルの時間が少く、実際的には直ぐ実行して呉れないだろう。京都では毎週やつている。岡山でも最近、税金の話がかたいと云ふので久米雄や風來子等が放送した。熊本でもやつている。地方では盛です。

一　笑＝十年近く前、主婦の時間が出來た時、私は家で仕事をしていた関係で男でありながらよくその放送をきいたのですが、その頃和歌、俳句の募集をしていたので、川柳の募集を何故しないのかと云つて投書した。選者に川雜の麻生路郎ありと云つてやつた。BKからは研究して期待にそいたいと云つて記念にハガキを送つて來た事がありました。

路　郎＝そんなことがあつたのですかね。私も放送は度々した。選もしたし、又その他の話もしたが、それはホントの川柳を知つて貰いたいためで、最近各地で行はれているやうな競技的なものや、刺身のツマ式のものではたとえ放送されても、川柳の價値を高めるものではないと思つている。

方　言

凡　夫＝雜誌に出ている句で難しい句がありますね。

一　笑＝例へば？

孤　笑＝意味のとれない句がある。

一　笑＝それは日が浅い故だと思う。その中に分つて來ますよ。

凡　夫＝「さくまようせんとあかんと蛙切り」と云ふ先生の句がありましたね。

路　郎＝あれは伊賀の方言です。方言は解りにくいのであまり使はない方がいゝでせう。京都や大阪の方言は全國的に理解されているが、地方の方言はあまり知られていない。何の事か分らない時がある。方言の分布を研究すると面白い。一つの方言が円を描いて拡がつている。円と円の

交錯によつて中間的なものが作られる。日がたつと円の中心の方では消えて外圏の端と端にのみ残る事がある。大阪は方言が新しくどん〳〵変る。昔の大阪の方言は地方に残つている。「そやさかいに」等は大阪では此の頃は使はない。

凡　夫＝この辺では今頃使つていますよ。

路　郎＝言葉の分布は本当に面白い。子供はその土地の言葉も又親の言葉も使う。それでだん〳〵と他の地方に拡がつてゆく。家族のものや親類等によつて傳はる。東京の眞中で店では全員大阪弁を使つている家がある。外では東京弁を使う。

いのちのある句

笑　鬼＝眞実味のある句と云うのは生命ある句と同じ事ですか。それは悲しいとか嬉しいとか感じた場合出來た句ですか。

路　郎＝眞実と事実とはちがいひます。「新川柳講座」に眞実味の句に就て書いていますから、それを読んで下さい。眞実味の句も、生命ある句ですが、眞実味の句以外にもいのちある句は沢山あります。眞実味の句と云うことと、いのちある句と云うことと同義語ではありません。

投句について

孤　笑＝大変いゝ句でも作者によつて没になる事がありますか。

路　郎＝そんな場合はあります。この人でなくては出來ないと云ふ句のみをとります。Aの句ではあるがそれ以下のBやCにも作れると云ふ句は没にいたします。始めて僅か一年位のものは、そうした人達にくらべてどの句も没であるが全没にすれば、その人は目標がなくなる。自分の句の中でどれがいゝかを知らせて貰う事によりこれからの指針を示してもらうとだん〳〵とのびて來る。そうして育て上げる。個性をのばす爲にぬいている。初めの作家の句は大抵先輩が作つているが中でも調子が整い、どうにか詠んでいる句をとつて指針を示すことにしています。

一　笑＝この支部は熱心であるが雑吟の投句は稀れと云はれている。この話によつて分つたと思うからどし〳〵投句して進むべき方向を知つて下さい。先生は個性をつかんで伸ばして下さると思います。

笑　鬼＝出したいがきまりがわるいと云ふ氣持がある。私も知人があつたので這入れたのです。大抵の人がさそはれて入るのだらうと思ひます。

一　笑＝年をとると個性が出來ているのか素直に這入れないですね。

笑　鬼＝選に入れば自信が出來て來るが没になれば自信がなくなつてしまいます。あやめ池に行つた時に自分の句も本当の句になつているか、心配だつたのだが先生の選に一つ入つていたので、それならしやうかと考へる様になりました。あの時一句も入らなかつたら川柳はやめようと思つていたのです。

一　笑＝安心感と目標が出來たのですね。

笑　鬼＝投句していても自分の句でどれがいゝのか分らない。雑誌に出て始めてあの句がよかつたのかと思うのです。

路　郎＝自選はむづかしい。自分の句は傷があつても可愛いゝ。九人も子供があつても、捨てる子はないのですからね。自分の句をすてる方法を教へてあげませう。今日作つた句は全部句帳に書いておきます。捨てる句はない筈です。一週間して他人の句として読んでみて、まづいと思うのには棒を引く。又三月程経つてあけて見る。そしてわるい句は消す。一年程して又出して見て棒をひく。第三者の立場になつて選をしてゆくのです。柳友に見てもらうのも、一つの方法です。批判は自分が作らなくても出來るのですから、自分と同じ位の力の人に見てもらへば大抵いゝと思はれるのはよい句です。相手は自分の生んだ句ではないから冷静に批評する。唯一つ困るのはその人が古句や先輩の句を知らぬので類句を捨てぬだけです。

一　笑＝女の方々、作句の時間はどんな時ですか。

二　葉＝バスを待つ時とか、歩いて帰る時など作りますが、夜が多いですね。

樹　甫＝勤めていますと如何しても落ついて考へるのは夜になつてしまひます。

凡　夫＝どうも此の頃自分の句に自信がなくなつて、どの句も皆つまらなく見えるのですが。

路　郎＝肉体が疲れている時は句がよく見えない。

樹　甫＝さうおつしやられるとそんな氣がします。その場合他の人の句も下手に見えますね。

路　郎＝さうです〳〵。

一　笑＝まだ〳〵お話はつきませんが、大分時間もおそくなりましたので、これ位にしておきたいと思ひます。先生どうも色々といゝお話を有難度うございました。

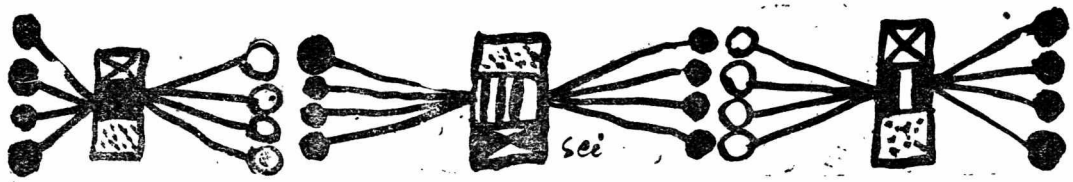
○

二次会に移つて色々雑談があり、とにもかくにも全員がたのしく時を過し思ひがけない、先生の隠し藝なども見せて戴き和やかな氣持で会を終りました。

出席者は

麻生路郎先生
夷一笑
木下和水
大川笑鬼
岩崎樹甫
岩崎揚甫
荻原二葉
角谷凡夫
武田孤笑
狩野燕子

樹甫筆記



川柳塔

麻生路郎

冬のビル黒々として威圧する
サンシーもあるけど二三人は生み
鳥打をかむつてあとをふり向かず
月に吸はれ戸も締めないで出て行つた
生活(くらし)とは別なプラカードをかたげ

○

兵庫縣　奥村丹路

下の子を叱れば上の子までが泣き
秋の月誰か小便して行つた
コスモスの倒れても尙咲かんとす

共同募金始まる

赤い羽何処かで落し家につき
多情佛心ひそやかに靴を脱ぐ
軸あり陶器あり安物に相違なけれど
モク拾ひ僕の心もひろて行き
秋は淋しいからいやと淋しい女
資本家同士話が合うて印を捺し
はる〳〵と來て人の手に林檎乘り

大阪市　浪玲之介

闘病譜

慾一つ一つづつ捨てまだ癒えず
故里に病めば山まで抱いてくれ
犬養の漫画が着てる裾模様
へえまいどそれが言えない世につかれ

奈良縣　上田翠光

コスモスの行儀は繩に縛られる
雲の白さにみいるふるさと
失費多端豚の育ちのもどかしさ
あんな顔してゝ原書を読んではる

横浜市　福田山雨楼

玄関の病床眉で逝くと聞く

國会図書館に勤務

朝夕を人にもまれる身とはなり

池田市　戸田古方

友達をさけて通るも金のこと
小心なから世話すきになつたのさ
相合傘こんどは男の方がさし
雲水もチャックをつけた頭陀袋
正直に正直に本心をゆうよつぱらい
自殺した最後の見栄のよい行儀

布哇　内藤草一郎

よいとこもあつたと切れたのを思ひ
紅一点どつか冷たい処があり
捨て鉢が倶楽部の花と咲ほこり
洗濯もせずに無言の抗議なり
支店長の肩書に惚れ髭に惚れ

尼崎市　水谷鮎美

老母エイ喜の祝

伊勢海老の鎧うれしい台所
洗ひ髪してにごうさん少女めき
唐辛子西陽の中に数へられ

東京都　宮田不二

弁当が少しへこんで無事出社
東京の良さターキーと擦れ違ふ

平塚市　木村孤浪

自動電話列焦せらせて嬌笑す
官舎から発車まぎわにゾロ〳〵來
STOPの型でみがきや片手上げ
はかどらぬ訳は白足袋新しく
サンダルの小指ちよい〳〵土もなめ
お届けをいつか受取る年になり
木炭車女子供に横切られ

大牟田市　高田抱逸

娘の税も國の予算に織り込まれ
再々の事で社会課とりあわず
サーカスの封建性を訴へる

布哇　村田流水

司会者の英語日本語ビヤの味
一番のたよりにしてた子は戰死

大阪市　市場沒食子

神経質な癖に女に脂下り
経驗でのし上げ語学不得手なる
盗まれた柄古着屋で風に搖れ
言ひ足らぬ点はと祕書を振り返り
清貧に甘んじ主義の殻を閉す
生体を利用し布團のやり直し
昇格の笑へば損の顔で居る
頬骨よ肋骨よ秋のもう彼岸
腕吊つて第一投手ベンチに居

名古屋市　吉田水車

伏せば虫仰げば月の侯とかや
おいらんの頭のような貨物船
福引のある間千客万來す
十五円の五円は梨にかくれけり

大阪市　須崎豆秋

お位牌も煙たいでしようさんま焼く
小市民軒に玉葱ぶら下げて
ペタペタと描いてやろうか銀襖
どの草も草も見給へ実を結び
こぼろぎよ動くな猫が見ているぞ

名古屋市　中西おさむ

ボールペンくるくるくると嘘も書き
自重した言葉冷たいものにされ

大阪市　正本水客

海岸線泣くかげもなく晴れわたり
ふるさとの風は両手にありあまり
沿線に裁判沙汰の土地を持ち
着古した背廣をひとつ置いて死に
舞扇も賣つて了おうかと思ふ
年上の女と歩く百貨店
前借を引いて餞別渡される

神戸市　竹内潮花

秋の雨何やら彈いて見とうなり
貰ひますねやと青春嬉しそう

大阪市　北川春巣

餌をやれば鶏の眼も媚を見せ
母ちやんの趣味なり握り飯のごま

大山寺宿坊

宿坊のオフ・リミツトがすゝけてい

奈良縣　尾崎方正

シャツもズボンも草疲れて秋
色盲と疑ふ程の好み行く
すぐ降りる人が座席へあつかまし

岡山縣　大森風來子

納税をせよと書方二重丸
税務署へかけ合ひに行くぼろを着る
脱税で建てた別館押へられ
スクーター脱税をした音で去に
コンマさてどこに打たうか税の高
妾でも持てと女房ほざいたり

大阪市　木下幽王

落葉はら〳〵私にまで散れと云ふか
讃美歌が聞える坂で歩をゆるめ

鳥取市　中島鉄洲

哀れなは俺から儲けようとする
便利工くらいになれる年の功
食膳はけふのノルマを心得て

大阪市　新川博也

定期券十八らしいすゞのおと
もう退社時間かパフの音がする
無理をせんようにと藥くれて去に

映画「野良犬」

スリ係り刑事としての笑ひやう

大阪市　橋本美奈子

新婚の買物サラリー考へる
むつまじく親の金食ふ新世帶
人格はさうであろうが食へぬなり
久し振りビールぐらいでおさまらず

出雲市　尼絲之助

又甘諸かとも言われないくらしむき
カストリや我が人生は欺けず
妻不在科学に遠き台所
あいさつの中にも捨てぬ儲け口

大阪市　水谷竹壯

稽古場の恋のしぐさを笑われる
添ひとげるつもりで探す二階借り

廣島縣　弘津柳慶

長男が癒れば長女が床につき
口紅もこつてり婦人部長なり

八代市　佐野卜占

社を辞せば掌かへす薄情さ
税務署に反感を持ち押へられ
古簞笥迄も税務署積んで行き
高利貸程に税務署利子をつけ
生活苦へまだ税金を押しかぶせ
税務署はみな脱税の様に見え

兵庫縣　小西無鬼

パーマにしロングにしても日本の娘
お祭りへ此処もかしわの跡の羽

神戸市　大鶴喜由

何かと云えば公務員法楯にとり
蛙食う蛙人を喰う人淋しかる
原爆と原爆に狭まれた國を思いつ
一人前喋るがあくが抜け切らず
妻をつゝいたら異性の反應があつた

新居浜市　在間小楼

夕焼の白帆も秋の海となり
諺をまぜて話して侮どられ
父母知らぬ同士夕陽に立つ姿

大阪市　土井文蝶

人望があるとは寄附の高かいな
工場貸ぞ資本も貸ぞとおだてられ
予備知識なしに税吏はかき廻し
坊んぼんの腕白ほめて少し借り
ブギウギを眞似るに母の眼を逃れ
働らいて居るぞ弁当持つて出る

布施市　糸本醉月

親のある幸を五十の身に感じ
避姙藥あれやこれやと又姙娠み
焼跡の燈籠へ南瓜風情そへ
大僧上道義低下を歎くのみ
世に逆ろう如くロングスカート流行り

奈良縣　白牛奇朗

坊さんの持つライターの素晴しき
清水谷鈴のついてる定期入

岡山縣　山分淑郎

井戸水を賞めて先輩客になり
闇屋の手帖○と×と△と

大阪市　渡辺孫拙

雨だれの音かときけばタイプなり

デパートで正札の○に思案する
奈良縣　飯降白香

誰も彼も自分のことで一杯だ
浮浪兒のこかげの寢顔は青かつた
奈良縣　西辻竹青

狼藉へ車掌なか〳〵近寄らず
終電車窓を閉め〳〵車掌ゆき
呉市　林野甦光

姉さんのお古へ袖を通す秋
コスモスが此の毛足にも絡みつき
引揚げて帰る日迄の妻だつた
二三杯あふつて父の行く処
西宮市　阿万万滴

秋の美術連合展から（五句）

競馬場ひろ〳〵雲の峰の下
春と云ふ景色ポン〳〵船がゐる
網をあむ老夫のしわも網の色
暮れ果てゝポリスボックスの赤き灯よ
運河たゞしづかに霧につゞいてゐ
古着屋の貴をどこかで虫がなき
京都府　間島青丹子

手がかりの無い儘世間に忘れられ
何不足なく故郷の土になり
布施市　森下愛論

あひびきの途と知つてか易者立ち
CAMEL喫ふ余裕を妻にせめられ
大阪市　太田良子

だまされてゐると知つても笑つとき
治りまつせと肩を叩いていなしてゐ
大阪市　松江梅里

アルバムに母も十九の春をもち
倦怠期昔はやさしい人でした
供出もせず燒けもせず金時計
大阪市　伊藤定美

拾つても女に用のない煙草
恋すてゝ貴のテレスに猫とゐる
首切つて生産計画とは寂し
岡山縣　丸山弓削平

路郎先生を弓削に迎えて

師と弟子と膝つき合す旅籠の灯
子宝と言うて育てゝ女給にし
自轉車は錠を掛けられて釣を待ち
花嫁のかつらは父が持ち帰り
旅に行くいでたち赤い羽をつけ
コスモスの根元を見れば髭を垂れ
失恋をする色で咲くコスモスの
ライオンの様に泣きたい日もありて
花束を捧げる役が市長の娘
岡山縣　直原七面山

肉体の魅力を賣つてレヴューなり
裸体画は一人になつて見る積り
卒直な申出女体捻ぢ
結局は燃えてしまえぬ未亡人
夢は夢今は妾で満足し
別な声出してドレスをものにする
愛情の冷めて寢床を二つ敷き
男性の不平押へる接吻し
痛い程乳房おされて默つてゐ
欲情を逃れん爲の子を抱き
男性の愛撫を浴びて肉の艶
崩れ行く女支へてキッスをし
雷の音を合図ににじり寄り
口説く氣か男煙草に火をつける
大腿に女らしさを見つけた夜
東京女の素肌に触れてみる
岡山縣　黒田笑泉

読経の顔へ曇りはなかりけり
ゆく末は此の子にかゝる子を抱いて
宇部市　上林粗影

あちらの話夕餉の座にこぼれ
おゝペンの先から文化逃すまい
白粉の匂ひに負けたニヒリスト
姫路市　狩野燕子

男女同権然し男は強いもの
皎々としてホームに秋の月

○

金沢市　安川久留美

居るといふ土間の隅なる松葉杖
魂を入れた面にも蜘蛛の糸
松山市　前田伍健

予感とは掏られたあとのあいつだろ
安樂死後の証拠に一首よみ
疑ひもなく女は世を知らず
ひよつこりと阿呆の言葉心衝く
口も手も足もお達者ピアニスト
大阪市　橋本緑雨

吊皮で見る裾脚のくろとめき
街角でさびしき人をみて戻り
佛壇と神棚があるだけのこと

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社

四世川柳 眠亭賤丸（上）

冨士野鞍馬

眠亭賤丸は後の四世川柳で、人見周助といひ、風梳庵と号し、安永七年の生れで、京橋八丁堀中の橋に住んでゐた江戸町奉行附の同心であつた。同心といふのは当今でいふ警官で、與力（署長のようなもの）の下役である。

柳多留から見て人柄はあまりくわしくわからないが、若い時から、文日堂礫川に川柳風を教へられ、二世川柳の選評もうけてゐたようである。

柳樽で見ると

御湯花に薪のいらぬ下の諏訪（タル三七）

の句が一番古く、文化二年十二月廿七日に小石川諏訪大明神奉額の句で礫川の選である。この時二十七才であつた。小石川琴我の主宰する「かの子連」に属してゐて、文化三年（二十八才）から文化八年（三十三才）までの作句振は、柳多留三十五編から五十六編までに次のような句が見え

当分は來やるなと母一つぬぎ（三五）
行燈へどれつたい穴二つ三つ（同）
鷹の夢見てから息子氣がそれる（三七）
くら替に出る氣遣手をたておろし（八同）
その面でからしをかけと朝がへり（同）
雑兵に宿称やめを買てやり（三九）
清浄な御身をけがす時の難（四一）
棒ほどなこと針ほどに母かばい（四二）
彌治郎が娘突出しからはやり（四六）
かわらけのように下馬先笠をなげ（四七）
お味方と敵で二六が十二文（五〇）
金箔のついた淺黄を高尾ふり（同）
素読の師くすんだ顔で子をてかし（同）
錐をもむように拜むはひどい願ン（五四）
なきにしもあらず禿にして育て（五六）
四金目はやり手やつぱりこわい面（同）

こう並べてみると文日堂の川柳風が傳つてゐるように感じられ、まだ狂句にはなつてゐない。

文化八年の五十八編の緒言に

『味酒の三輪にあられば杉ばやしたつる門にもあらず。版元の花屋のしるしは柳樽の汲どゝ盡す、跡ひき上戸の何篇もくり返して、今五十八編の大盡引受たる志津丸子の手際は、すつはりえらみ出せる句々はみな一本木のまじりなし。予も飯よりは好の道此酒の美味を感じ鼻のさきをひつかせて斯如し』

と当時大流行の滑稽作者十返舎一九がほめてゐて、賤丸は始めて選評をして、軸吟をつけてゐる。

咲匂へいく代も法りの花柘榴（この時三十三才であつた。）

その頃の一方の勢力者であつた琴柱連の五葉堂麹丸とはあまり親しくなかつたらしく、麹丸主催の会へは殆ど出席してゐない。又その頃の柳多留各編には有幸等の句が目立つて多い。文化九年文日堂主催の初代川柳二十三回忌の会には賤丸の名は見えず、この二三年間の句は

持参金切れのある面ばかり也（五九）
二声と啼かぬ小倉の郭公（六〇）
染かれて地名に残る紫野（六一）
くりからの様に兼平落馬する（六二）

等この辺からボツ〳〵狂句臭くなりかけてゐる。そしてもう一廉の選者らしく行動して、文日堂の後楯で、二世川柳を問題にせず、文政元年二世沒後は三世の存在も認められず、一段と羽振を見せてゐた。

文化十二年の文日堂の在世追福会には

生きた鰹をぶち殺す錢で喰ひ（六七）

十四年の佃島住吉社額面の軸吟に

千早ふる神垣涼し松の風（七〇）

文政二年には三世川柳がたつた一度だけの選をしてゐるが、その七十一編を見ると、賤丸の勢力は三世をしのいで

川柳下風涼し法の声（七一）

と巻尾に宗家振の軸吟を見せてゐる。

そして文政四年の七十四編には自ら序文を書き

『柳樽と題せしはじめより、いま七十有四編にいたれり世の中のこと何くれといゝ盡さぬはなければ、これがなかに買色てふものはわきてよくそのあなをうがち、川ばたやなぎのみすに夜を明す淺黄裏も、ゆふべに宵柳鮓の声を聞て、あしたに見かえりやなぎの別を惜むたをやかなる柳の腰にしどけなくむすぶ小柳のひらぐけも間夫にそらとけあらんかとこゝろ憎し、道のちまたのひともと柳根引なしたる草庵か軒、此あるじのもとめに應じてかど口へ植つけることかくのごとし』

又七十八編には、文政五年五月十八日の二世川柳、花屋星運堂、玉章、有幸、雨夕の五霊追善会の序文を

『家内喜多留の呑仲間、川柳、玉章、有幸、管裏、雨夕、等はひとしからぬ浮世の醉さめて、先きに黄泉國へ舁入したりしをおもへば、なみだの泣上戸か、声はりあげて諸君子の言の葉を乞ひあつめて樒とし、流行を高い香となして、もつて五霊位に手向ることとはなりぬ』

とるらさうな書振で、益々隆々たる権威を示し、間もなく四世立机までの柳多留には

櫻田に駒のいななく初登城（七六）
秋ならば露と答へん梅の雨（七八）
風呂敷のはしぬひ多分女房の手（七九）
仰ぎ見よ音樂雲の上から來（八〇）

といふような選者らしい軸吟を発表して、普通の作句はしなくなつた。

血圧降下に
アークレミン
注射剤
山之内製薬
血管アウトホルモンとアミン塩類

河童の句その他

高鷲亞鈍

本誌十月号の座談会「日に月に積上げる研究」に就いて二、三追記したい。

愚陀君の〃河童〃の句に就て言つているがこの句は特異な句で河童という現実に存在しない人間の空想によつて言ひ傳えられたものに泡沫の如き恋に結びつけた、愚陀君のフイクションの成功が一應名句と称せられたからといつて、句会で偶然生れたのでない。

愚陀君の句は寡聞にして自分は知らないが、斯ういつた特異な、虚構化された川柳を、平常から作つていた人にして、始めて句会にも、類例のないあの種の名句が出た所以である。

名句とは、さあ作りませうと思つても自分が意識して作れるものではない。

句会の課題吟であろうと自由吟であろうと、作られた自分の句が、人々から、その多くの人から、これは名句だと異口同音に唱えられて名句が出來るわけで、川柳とはそのやうに客観的に價値づけられるものである。

又そのように普遍的な批判の対象になるものである。さりとて誰にでも判る川柳が客観的とは敢えて言えないと、沒食子君の問に答えた所以は、川柳が客観のまゝに抛り出すものではなく、こと川柳も藝術のジャンルであるなれば、その客観は主観化——それは個性的な——されねばならないと附け加えたかつたのである。

句会の席題と兼題の句の良悪の場合でも、やはり常住座臥身ぐるみ川柳をやつている者は、時間的にも場所的(空間的)にも頓着なく、良いものが出來れば出來るし、悪いものになればなるし、席題も兼題もそれには関係がない。作れないというのではなく作らないのである。

初歩の間は題を課さなければ書けず、深く入れば課題吟よりも自由吟が書けるというのは、一應川柳人(座談会では自分を文学青年とみたてゝ例をとつた)に成り了せたとも言えるが、しかし一歩進んだ藝術家としての川柳エキスパートになれば、課題吟でも、充分こなせるだけの自信がなければならず、それは句会の席題、兼題など問題ないと思う。というのが僕の主張。

例えば路郎師だつたら、新聞社や雑誌社から、これ〳〵のものを書いて呉れと言はれたら、こと川柳に関することなら、どんな註文でも受けられるに違いない、と言つたつもり。(けれど座談会には尻切れとんぼで、何故に路郎師を引つぱり出したのか理由がついてゐない。)

以上の通り補足して置きます。この僕の主旨に就ては、種々異論もあらうと思うが、僕自身責任をもつて、それに應える用意のあることも知つて戴きたい。

教育楽器はヤマハ
日本楽器
南区肥後橋筋二丁目ノ一
電話 南 ㊿ 3413 番

課題吟 自轉車

川村好郎選

自轉車が心配ですと長居せず 元馬
滯納の税へ自轉車攫われる 一葉
自轉車の裾が氣になる向ひ風 芳泉
盗まれた自轉車へも税金が來 夏六
月光を浴びてペタルの軽いこと 凡夫
供米の不足自轉車で運ばれる 牛歩
此家に似合はぬ自轉車よく光り 酔歩
自轉車に乘れず此処も不採用 聽松
空氣入交番氣軽に貸してくれ 杜的
儲つた日のペタルを軽く踏み 同
尻落付ける氣の自轉車を内(入れ 青丹子
自轉車へ先代ゆずりの折鞄 同
自轉車のうしろへ栗の枝をつけ 水客
自轉車を降りて昨夜の乱を言ひ 同
自轉車で來て自轉車の置きこゝ 茶佛
自轉車で來ればよかつた荷の高さ 甚光
自轉車を習い始めた轉びよう 吐平
口笛となり自轉車は坂を降り 庸司
税務署の呼出しペタル重く踏み 酔月
自轉車に乘れる娘の勝氣なり 奇朗
自轉車預りますラムネ冷てます 梅風
自轉車を磨き明日の儲け口 草々
恭ば良ア恋人乘せて踏むペタル 七面山
今日はさよなら自轉車もう盗られ 玲之介
競輪の陽に一着は矢の如し 鮎美
自轉車で会ひ商談がまたはずみ 同
自轉車をかついで越える峠道 測年
自轉車で荷物が先に駅に着き 茶々
競輪は四本の足で飛ぶ思ひ 山雨楼
歩くよりましと自轉車貸してくれ 孤峰
スマートな自轉車クロハシャツが乘り 白竜
再婚はせぬ氣自轉車乘りまはし 五郎
自轉車を買つて貰つて用が殖え 高志
退職の金で自轉車やつと買ひ 郁夫
自轉車の前後に乘せてる子煩悩 千舟
自轉車を飛ばして來ました汗をふき 秋男
ペタル踏む産婆に朝の霧があり 華水
自轉車を盗られバス出勤をまゝ続け 齊花
ストップにかゝらぬこつで踏むペタル 重雄
自轉車に乘せてもらへる子の機嫌 曉明
採用と決つて自轉車に乘る稽古 斗四翁
自轉車の掃除したとこ借りに來る 弓創平
自轉車かすりと並び始業ベル 正司
自轉車を盗られ鍵だけ持つて去に 孤舟
荷物台用心深く母は乘り 三花堂
自轉車を賣つて軍業の日を迎え 東夢
貸金の言訳け訊きに行くペタル 葉光
佳・自轉車で誰やら声をかけてゆき 青丹子
同・集金も出來ずパンクして戻り 不二
同・自轉車のパスと競争する若さ 同
同・もう駄目ですと自轉車屋に見放され 卜占
同・見返りの自轉車積んで海靜か 草月
同・自轉車を預けベートウベンの畫 鮎美
同・保健婦のペタル村から村へ踏み 湖月
軸・今日も又バイシクルオーダーの電報來る

近作柳樽

神風と同じ風だが田を流し　兵庫縣葬花
たまりかねて英語の字引買つて來る　同
先はどうなると胸でも張つて歩いさけ　同
寝る前に時計卷くのも主婦の役　同
安定所引つ越しをした跡へ行き　同
やはり女無駄な言訳け言つている　同
あれでよう生きているなと憎たらし　小松市茶佛
喧嘩していても赤ちやん生むつもり　同
インテリの弱さアカハタ読んでるる　同
赤ん坊を抱く男湯の湯か熱し　同
税務署を出た興奮は振り向がず　同
走つたら追つく儲け口なきや　同
世事に疎くなり老妻へ愚痴を云ふ　兵庫縣夏六
空車馬も帰宅の顔をする　同
盃が斜めになつて惚けてる　同
オイッチニオイッチニと家鴨よく歩き　同
重役と俺をへだてた大机　同
律儀者背を見せる程お辞儀をし　同
小金持平價のことが氣にかゝり　岡山縣満年
金づまり祭の色がちよつと褪せ　同
眼薬をさして読書の秋らしく　同
子の足へ親父の靴が間に合はず　同
お前でも主婦になれるか一人つ娘　同
若禿の帽子部屋までかぶつて來　同
稲の穂へなにやらホットする九月　愛媛縣旭堂
血統がどうのこうのと犬の事　同
養子の爲に食はずとためて死にけり　同
日記にはせめて眞相書いとこう　同
無口無藝で酒はつよかり　同
頭領は顎でしやくつて手を触れず　愛知縣吐平
生じつか若い女將でからかはれ　同
祭壇の酒の仕末を頼れる　同
博士から博士に換えて病み続け　同
目覚しを誰がかけたか日曜日　同
成人を致しましたと的ぎに出し　岡山縣芳泉
熟れ切つた果物に似た坐り様　同
後家を立てますとなぜ云つたらう　同
四十の恋肉体の夢ばかり　同
自炊してゐると云ふのへ一寸惚れ　同
ポケットの紙屑五銭の札もあり　石川縣山々
洗髪おかつぱ頭を押へつけ　同
この家丈け雨が降つとるらしい音　同
隠藝もなく正座でかしこまり　同
寺の裏誰の墓やらこけた儘　同
料金を拂へば小包ほりやられ　石川縣醉羊
青天井彼女も土堤にひじをつき　同
嬉しさわ母も一緒に髪洗う　同
三味線はつらし流行歌に合せ　同
納骨に畠の住職呼んで來る　同
貯金帳昔の夢を数へて見　石川縣茶撫朗
道草を陽氣な春の罪にする　同
幕間の眼に天井も楽しまれ　同
ハンマーは重く待遇あきたらず　同
無雑作な櫛が生きてる洗髪　同
お茶飲んで喋つて居ても八時間　大阪市春雄
秋酣けてズボンの増へた女事務　同
割入んで坐つた奴が得をした　同
無爲無策それで官職昇つて居　同
結納も米を運んで貯めた金　貝塚市千舟
寝卷着せかへて見舞の母帰へる　同
入党を拒めば露骨にあざわらひ　同
その手腕惜しまれて去る赤い医者　同

川柳料理暦

——冬の卷——

水谷竹莊

冬の田はわさびおろしのやうに見え　（古川柳）

涼しい秋が過ぎ、木枯しの吹きすさぶ寒い冬が訪れて來ますと、稲かりのすんだあとの畠は、ちようど、わさびおろしめの様に見えるとは、よく表現したものと思ひます。

蕗のとう踏みつけられて寒に入り　（古川柳）

寒い冬の朝、温い味噌汁の味はまた格別と思ひますが、その味噌汁へ、この蕗のとうをきざんで入れると風味のあるものです。

蕗は、佃煮にしておきますと、茶漬のおかずにもよいし、又胡麻あへなど、酒の肴に喜ばれます。

ひんぬいた大根で道を教へられ　（古川柳）

大根の料理法は、沢山あります。寒い時には風呂吹大根が一番よいと思ひます。塩さばといっしょに汁にするせんば汁、芽出度い時には大根（ナマス）等々、大根おろしの酢の物、みぞれ合へなど、皆様御存じの事と思ひます。

喰べて寝て今日のカロリーなど思ひ　（久米雄）

カロリーと言へば、滋養分の一番高い、牛肉でせう。冬の寒い日の牛肉のスキ焼い旨い事、まして好きな彼女と差向ひで喰べる味は？

小鍋立男に口を開けさせる　（小次郎）

好い人と飲む夜は女世帶染み　（同）

いつまでも肉と葱との仲であれ　（路郎）

昔天武天皇の頃、牛、馬、犬、鶏、猿の肉を食ふ事を禁ぜられてゐました。その理由は、牛馬は、労役に服し、犬は門を守り、鶏は辰を告げ、猿は人に似て居るからであります。然しこの禁も弛み後に山や野に放たしめたのは聖武天皇以後の事です。また肉を始めて喰べ始めたのは明治初年に江州高宮で牛を屠り、その肉を味噌漬として江戸彦根藩邸に送り、こゝで始めて公然販賣せられた。そして其の後対馬藩邸でも牛肉を販賣したとの事であります。

その牛肉の味噌漬の作り方を申上げます。

材料五人分で、牛肉の極上等百二十匁、味噌五十匁、砂糖十匁、酒五勺、粉山椒・又は、胡椒少量白紙一枚が入ります。

牛肉は五分厚位に五切として置き、味噌は酒と砂糖を合せてドロ〳〵にして丼の底に敷き白紙をのせ牛肉を並べまた白紙を被せ、残りの味噌をのせて、二時間以上放

二三度ももみくちやにする無心狀　石川縣光郎
凡人の生活に藝があり過ぎる　同
解決がつくまで醉へぬ酒の味　同
冷酒でよい有合せでよい更けてゐる　同
小包へ期待外れた子は眠り　石川縣魯木
宿を出てまだ待遇を論じ合い　同
小さいが初鮎ですと課長室　同
喫茶店裸婦の画像の見える椅子　同
代理になるのに衣裳も借して呉れ　石川縣味平
遺言に貯金帳には触れてなし　同
御用聞き將棋の詰手知つて居り　同
洗髪惚れ〳〵見入る艶と丈　同

瓦葺きにして

屋根瓦雨よ降れ降れ槍も降れ　鳥取市日滿子
試作品子に破られて棄てられた　同
配給も平和に馴れた人の列　同
引揚の赤でなかつた家庭の灯　同
精農と言はれる程の膝の継ぎ　岡山縣享平
疊屋は肘も道具の中に入れ　同
抑留の留守は十五で午使ひ　同
子の科学おたまじやくしをピンに入れ　同
友ありて花など持ちて見舞ひ來ぬ　大阪市小柳
お隣はキレイな見舞よくつゞき　同
借り電話ラヂオはホームランで沸き　同
切れ〳〵と医者はたやすく言つてのけ　同
一應は困りますよで收賄し　東京都高志
クキツクがスロウに変り夜も更けて　同
「お待ちしてます」營業用の言葉なり　同
子も共に貰ひませうの惚れつぷり　東京都東夢
中風の祖母は子なみに数へられ　同
民情を視察などとはひとむかし　同
なにゝするつもりか百姓から女專　滋賀縣美秋
寢ころんでわが愚さに苦笑する　同
街錄の思ひやられる主婦の口　同
手に蠅をとめて病んでる子が淋し　愛媛縣孤峰
少年の野球東京の子もまじり　同
へちま苗もろう御世辞のながくと　同
観察の鋭さ病人閑と言ふ　大阪市葉光
間引かれたように一匹仔猫の死　同
腕時計見ながら愚痴を聞いてやり　同
大阪で喰へず田舍で又喰へず　岡山縣鉄兒
婦人科の儲けたらしいスクーター　同
青春を花火の様に弄び　同
納めぬ氣煙草も喫はでまくし立て　日田市独活
月給を氣にして嫁に行きそびれ　同
誕生日金が有らうがなかろうが　同
そら言を云ふて握手をはぐらかし　岡山縣牛歩
闘病は襖の達磨見倦きたり　同
体驗を皆迄言へぬ避姙藥　同
お一つ如何と女將の如才なく　大阪市葉榮子
女將さん賣れつ妓の身にもなつてやり　同
一人身が妙に淋しい秋の花　同
銘仙をたゞやるやうに廣告し　滋賀縣敬二
極道へ兵に行けともう言えず　同
合槌を打てばおのろけ尙つゞけ　同
理くつには勝てず夫の手のやりば　大阪市志津
重役と言はれ借家に住んでゐる　同
色褪せた表彰狀なほ捨て切れず　同
橋の下で拾つた子だとからかわれ　岡山縣湖月
愛人を捨てゝお宮になつたろか　同
頼り度い氣持握手に力入れ　同
プラットのベンチでおしめをかえてまち　岡山縣茶々
江戸ッ子でおしやべりされてこそはゆし　同
一人ねてゐればあやしい音ばかり　同
陽当りへ首さしのべて洗髪　石川縣東代女
修繕ばかりで自轉車古びてる　同
藥局に先客があり買いそびれ　同

置します。

こうしておきますと若干長く置いても味に変化が參りません。そして味噌は必ず粒味噌を用ひます。喰べる時は金鍋を火にかけ、充分熱したとき牛肉をのせ、焼過ぎぬ様に焼きあげ適宜に切り、粉山椒又は胡椒を撒り、好みの野菜を添えて皿に盛ります。

人參の白あへ雪の赤合羽　（古川柳）

人參は冬の野菜の中の重宝がられる一つです。その白あへは、見ためにもきれいです。

白あへの作り方は五人前で、豆腐一丁、蒟蒻二丁、沢庵少し、人參三十匁、白胡麻三勺、白味噌三十匁、砂糖五匁で、先づ蒟蒻はたて二つ割として小口より薄く切り茹でゝ少量の醤油、砂糖にて下煮をして置き、人參は薄く短冊切として茹で、沢庵は細く千切にして水にさらし能くもんで塩抜きをしてかたく絞り、豆腐は布巾に包み水氣を絞っておきます。

胡麻を煎ってよくすり、味噌を入れて更にすり、豆腐も入れてすり、砂糖、塩にて調味し人參、沢庵、蒟蒻を入れて和へます。

冬の料理の王座は何んと云ってもフカ河豚でせう。古川柳にも河豚を詠んだ句が沢山あります。

片棒をかつぐ夕べの河豚仲間　（古川柳）
もう外に死人なしかと河豚を買ひ　（同）
寂寞として先生は河豚を喰ひ　（同）
河豚といふ晩で御座ると常世いひ　（同）
河豚賣は一生後家にうらまれる　（同）
死なぬかと雪の夕べにさげてゆき　（同）

にきびとり美顔水
ニキビ
銚谷順天館

河豚喰べて來たのを妻にかくしとき　（岡王）
大皿小皿ふぐのつくりのうつくしき　（鮎美）
先生の娘が河豚料理たべたがり　（古方）
てつちりへあんたまかせの箸を割り　（夕鐘）
食はすぎらい河豚へ弱氣の友と呑み　（文蝶）
留守番はふぐで一杯やるつもり　（水客）
取卷へ河豚の効能一くさり　（貴志子）
鱶酒の話になつて膝くずし　（角堂）

河豚の食用期は寒い間だけです、彼岸頃になるとそろ〳〵産卵期に入ります。

一体に魚貝類の卵巣には中毒する毒素を含むものがまゝありまして危險で御座います。河豚の卵巣には猛烈な毒素があって、食後二

河豚汁を喰はぬたはけに喰ふたはけ　（同）
河豚汁に夫婦別ある美しさ　（同）
河豚買つて他家のながしへ持つてゆき　（同）
現代人の詠んだ河豚とくらべて見ても、実に面白いと思ひます。
ふぐ鍋を誘つた方が毒味する　（水車）

弁当と無限へ続く日を歩く　大牟田風浪
電車又燃えましたよと驚かす　同
アベックのボートは流れるまゝにをり　同
労働は神聖靴をみがいたろ　愛知縣北雷
夜は長い貴郎の夜勤多過ぎる　同
スキ焼どこかコソ泥増えた夜警だよ　同
闘争は上手仕事ははかどらず　今治市映明
何処の庭見ても躑躅と松と石　同
雨続き折紙績木お人形　同
産制の図星が痛い若作り　長野縣柳兒
髪梳いて病妻秋の陽をしたい　同
妥協して落目を悟りきつて居る　同
降る星へ父の知識がもの足らず　熊本市室久
くじ買つて痴人の夢を追ふ如く　同
エヤーメール昨日の事が書いてある布哇東田楼
ハワイもうタラップと絹代下りて來る　同
元將軍劍と肩章の姿勢なし　兵庫縣無聖
一人だけ留守でも淋し子沢山　同
知らぬとは言わさぬ妻の目をおそれ　大牟田一葉
慰藉料も無いに判決五十万　同
稲を刈り取られて蝗どこへ行く　兵庫縣尋四
祝儀袋の重さにキツスまけてをき　同
海岸で撮される子は下駄をぬぎ　高槻市白溪子
青春の溜息金がないと云う　同
同情をすれば再婚しましたの　岡山縣久米女
正月が來たらと逃げた野球靴　同
口づけだけよと女目をそらし　東京都登志
葉書には二次会あるとは書てなし　同
首切りの歌も淋しいたからずか　滋賀縣観月
廣告の遊べ〳〵で秋になり　同
打明けるまでは綺麗な星をほめ　滋賀縣斗志
恋したう人へ淋しく月に立つ　同
生活の事迄医者は聞いてやり　貝塚市周太郎
庭の菊はめてお医者は帰へられた　同
デパートのウインド秋をしらせて來　富山縣壽郎
脱穀機疲れ切つたる音をたて　同
麻雀の小言も年と共にへり　姫路市凡夫
遠慮しながら麻雀誘ひ出し　同
四段ぬき眼鏡を一寸かしてみな　徳島縣夕鐘
ぽつ〳〵と芋の甘さを忘れかけ　同
赤い羽根垣をつくつて通せんぼ　大阪市平三
赤い羽根つけて貰つて氣も軽し　同
豆殻でお粥が出來る老夫婦　大阪市草右
鼻唄に合せ切符をチョンと切り　同
補回戰選手の顔も夕焼ける　高知市元馬
差押えに來た税務吏は知人の子　同
待遇が良すぎ女中は子を孕み　石川縣夢晴
三味線をちよいと貸しなの藝をもち　同
通勤は自轉車父を案じさせ　愛媛縣早百合
ペンで書くだけでは足りぬ様になり　同
社長だとそり身になつた脂肪過多　大阪市茂平
養生訓しながら飲んだ二日醉　同
ネクタイの柄に知性もみられます　岡山縣苑女
財産があればふられる心配し　同
金故の言葉と思ひ耐え忍ぶ　大阪市默立
楽しみは食うだけと云う顔で食ひ　同
くつみがく子に二タ親聞けば皆死んだ　愛知縣竹坊
手の切れる百円札よ何処へいた　香川縣迷觀子
そろ〳〵と越冬資金の話題です　滋賀縣郁夫
賃仕事遂に学士の母となり　滋賀縣正次
あゝ高い言ひつゝ口を可愛がり　大阪市惠風
恋人がまぶしく見える風呂上り　滋賀縣和夫

労災保険

傷のことにふれず年金うらやまれ　大阪市司郎
光二個吸うて月給疑はれ　大阪府壽安
生きる道幾筋もある大地なり　岡山縣娯句樂
どこでどう付けたか孤児も赤い羽根　東京都万年

時間にして死亡すると称します。それで河豚を料理致しますにあたつては内臓を傷けずに取出す事、内臓は喰べぬ事（下関や博多等名産地では極めて練達の調理師が、肝臓等を喰べさせますが）皮の両面は庖丁でシゴキ、塩で洗ふ事（毒のある虫が附着して居る事があります）風味は落ちますが肉も水でさらして血を抜く方が安全とされて居ります。

・ふぐの調理の仕方は、経験家から直接傳授を受ける様に望みます。河豚ちり（大阪神戸等ではてつちりと言ひます）あしらいに絹ごし豆腐、春菊、かぶら、等をいつしよに煮て喰べます。毒消しに、梅干、茄子などをだい〳〵酢に入れます。それにつけて喰べます。

この外食通に喜こばれる、鰭酒や、作り、白子、の喰べ方など専門の料理法は直接くわしく傳授しますから、私宛に申込んで下さい。柳友と一夕、河豚の句を作り、河豚をたべ河豚を語る会を催したいものですね。

湯豆腐がうまいと思う風吹く日　（愛論）

湯豆腐が好きで末ツ子ませてゐる　（葉光）

湯豆腐へあぐらをかいて愚痴をきゝ　（香林）

湯豆腐は豆腐を奴切りとして鍋の底に板昆布の五寸角位のものを敷き、水を入れて豆腐を入れて喰べます。薬味は葱を小口切として、布巾に包みよく水の中でもんで水にさらして、しぼつたものや七味唐辛子等用ひます。

醤油は土佐醤油でよいでせう。御承知の通り水氣の多いもの故「天つゆ、八方出汁」の如く甘くては喰べられません。土佐醤油は鰹節を用ひますのでこの名称があります。

湯豆腐の鍋がありますと、眞中にこの醤油を入れて温めながら喰べる様になつてゐます。これに野菜を入れ、橙柚子（ダイダイ）等の絞り汁をまぜた汁をつけて喰べるのを東京辺では「ちり鍋」と呼び、九州の小倉の名物湯豆腐には鯛等の魚を用ひます。博多では「白味噌」を入れたのを「ちり鍋」とよび、何れも橙酢を用ひて居ります。斯様に料理は土地々々によつて、若干の相違があります故、必ず一つの型に立籠る必要もあるまいと思ひます。

材料の取合せ等は、いろ〳〵御工夫されたらいゝと思ひます。

（冬の巻つゞく）

高級化粧料容器には勇然！
ヤマキンの……
黒硝子
大阪市天王寺区長柄西通一丁目四番
山銀株式會社
電話堀川四四七番

ビヤホール
みどり
上六交叉点角西北

川柳繪草紙屋

阿達義雄

あらゆる錦絵は、絵草紙屋から賣出されるのであるから川柳に現れた錦絵を語るには先ず絵草紙屋関係の句について述べて置いた方が都合がよいと思う。錦絵問屋として川柳に最も多く現れて來るのは、日本橋通油町にあつた鶴屋喜右衛門の見世であつて、歌川國貞が挿絵を描いた『諺紫田舍源氏』は、この鶴屋から出版されている。

母親は夜の鶴屋へ迷ひ來る　（三三）
道中は早し鶴屋で八文字　（八八）
吉例に鶴屋から買ふ草雙紙　（二九）
子を思ふ夜の鶴屋へ草雙紙　（三三）

最後の句は、子を思う夜の鶴にかけて、子に與える爲に鶴屋から草双紙を買つたことを云つたものであろう。

鶴に蔦火燵の上に二三册　（二三）
炬燵の上に鶴屋の絵草紙や蔦屋重三郎の絵草紙が二三册のせてある。
廻り合ふ巷を鶴屋の藏で待ち　（五三）

前の年から、曾我の錦絵を摺つて置いて、春狂言の時を待つて賣り出す。

当り狂言絵見世迄群集する　（一〇七）
笄のひぞり鶴屋のはしら女郎　（九〇）

「ひぞり」は、元來、乾反るから轉じたもので、かわいてそりかゝることであるが、此処では撓つた髪飾を何本も挿している花魁の錦絵は、鶴屋の大黒柱であり金箱だと云う意味ではあるまいか。

呼出しに見世を張らせる絵草紙屋　（一五一）
孝行を袋へ入れる画草紙屋　（六六）
壱枚絵かいどりを着た人だかり　（明和元年 義3・才）

「呼出し」というのは、花魁の最上たる呼出し晝三のことで、之は張見世をしないことになつている。

一枚絵は絵本の絵に対し、一枚として鑑賞する浮世絵のことであり、「かいどり」は婦人の通常礼服として用いたもので、帶をした上に打ちかけて着る小袖である。この前句は「すゝめ社すれ〳〵」となつているから、絵見世の前の情景を言つたものらしい。

次に絵見世に錦絵の吊されていた有様を詠んだものとしては、

一ヶ枚絵天窓の方ゥで綱渡り　（二三）
言訳にばゝち壱まい絵をつるし　（玉柳）
絵草紙で表をはつて囲ふなり　（一三）
稲妻やぶらりと下る絵屋の見世　（不明）

乙句は博奕宿を錦絵店によつてカモフラージュしたもので、丙句は囲女に絵草紙屋を営ませているもの、丁句は、絵見世に於て、華魁の錦絵が吊されている様を言つたのである。川柳では、おいらんの簪を沢山さしているのを、よく稲妻に見立てゝいる。

はんじやうさ女郎と役者ぶらさがり　（三四）
角力取並ぶや絵屋の店ざらし　（二三）

錦絵見世や絵草紙屋としては、鶴屋の外に、本材木町一丁目の西宮新六の見世。下谷池端仲町の伏見屋などが句に詠まれている。

三馬の夷講正客は西の宮　（不明）

式亭三馬が地本問屋の西宮と親交のあつたことを現すと共に、西の宮夷子に掛けたものであろう。

夜舟の絵燈籠伏見屋へ買ひに行き　（天保）

伏見と夜舟との縁語を狙つただけの句で、別に大した意味のあるものではない。又、葺屋町河岸の市村座番附を賣る山本重五郎見世を、

狂言の筋を教へる重五郎　（天保）

と詠み出している。

人間川柳味

筆が生いてき生き人楚るい

★

安川久留美

私は筆に遠慮なく思うまゝを書かれた杉村楚人冠氏がもと明治時代からの川柳人であつたらどんなに妙味ある句がほとばしつたことかと空想してみた。それは同氏が今から十四年も以前の週間朝日にのぜられた「山中説法」の随筆から日本のバーナードショーといつてもよい程の諷刺文学であるを見のがせないからである。いまその一節をこゝに拔萃してその妙を味つて見やう。

「退屈といふは無学文盲の徒のする事である、相当の知慧才覚のある者に退屈なんどのあらうやうはない。話相手がなければ物をよむ、よむ物がなければ何か書く、それもなければ默つて静かに考へるといふは人間のみに恵まれた天の賜ものである。」と

之れは一般として屁理くつに採る人もあらうが私は、さうでないと思ふ。人間のみにめぐまれた賜物――そこで川柳の短文学も日本人のみにめぐまれた詩として社会を観察すれば何かしら十七字に精進することの幸福であることが心の隅にひそむやうである。そこで楚人冠氏の説法をもう一ッ、

「腹立ちまぎれに勢こんでかいた手紙は直ぐポストに入れずに一日待つがよし、こんな手紙はかいている内に段々怒りがとけて、書いてしまへば、たといそれを相手に見せずともせいせいするものだ」と。

成程之れも川柳式に穿つてある。かつて「番傘」誌上に之れとよく似た筆法で柳文を書いた人がある。夫れは確か晩酌に微醉の時浮ぶ想を思ふ存分書き立て、あくる日になつて嫌氣がさし、其稿を握り潰すといつた風な文章であつた。川柳も又この如くであらう。想が浮んで「面白い！」と自分で考えた句をその儘活字とせず、句を控え一日延ばしたとすれば、あとにいや氣のさす作品もあらうし推こう添削によつて句が一段と光る場合もあらう。徒らに氣短く自句尊重の自惚れ作句はあとに悔みを殘すというもの。自己満足はある場合反古とする事に躊躇せないのが即ち自重というものである。要け作句も「大衆の鏡」に一應合せ鏡して後発表するだけの心がけをもつ川柳人となりたい。

（二四・一〇・九）

いのちある句を創れ

花地柳壇

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

作句と話の會（本社）

十一月五日　午後六時
於　大宝文化会館

夜の句会にも段々馴れて、集る柳人も落付いて作句出来る事は嬉しい限りです。殊に、美作支部から福島鉄兒氏の出席があるなど大きなよろこびでした。

今月は、「作句と話の会」とし作句を締切つてから、種瓜平氏から漫画に付いて、専門的な話があり、川柳以外の話であつたが興味深く聞いた。続いて戸田古方氏は、眞摯な態度で詠史川柳に付いて例句を上げて話され得る所が多かつた。席題、兼題、披講後、例によつて路郎師の熱辯に魅せられ、盛会裡に散会した。（文蝶）

出席者‖路郎・文蝶・古方・壽安・豆秋・水客・万滴・青丹子・鮎美・緑雨・鉄兒・春柳・義次・正司・修三・文雄・翩骨・夏六・迷宮・志津・白柳子・葉平・生々庵・籐彦・旅風・梅志・笛星・春巣・淡舟・愛論・春巳・季賛・豊・正則・梨里・一歩

兼題「明治」　麻生路郎選

銀時計明治の音をきざむなり　水客
履歴書に寒むく〳〵明治生れも　生々庵
芝居の帰り母は明治の話しする　万滴
古本屋明治文学だけそろへ　文雄
明治まで幽霊なども生きてゐた　籐彦
夜明けまで呑めた明治の五円札　豆秋
貫一のやうな男がいた明治　同
自轉車が借る提灯は明治めき　白柳子
明治一代女花柳章太郎　鮎美
豪農の明治時代と言ふ構へ　笛生
何もかも明治好みで世にうとく　万滴
金モール明治の垢を出して見せ　夢裡
これも人生か明治の髭をなで　同

兼題「平　和」　水谷鮎美選

秋空へ鳩がとびたつ文化の日　淡舟
ポツポツと村に平和な灯がともり　豆秋
平和なる月夜へちまぶら下り　同
旅客機のひびき平和に稔る村　白柳子
風呂焚いて平和な軒を這ふ煙　同
世は平和今川焼を背廣やく　修三
車窓みな稻子平和な國の汽車　春巣
然望を切つて切つて切つて來る平和　古方
小供等へ平和を乘せて象が着き　春巳
平和來てやれうれしやに首ごなり　義次
蟹の眼に雲がくずれて雪暮れる　水客
世は平和女いよいよ派手になり　修三
平和なる日々疑もなく暮し　愛論
夕陽とづかに平和な國の海へ落つ　万滴
生命あつてしみ〳〵平和祈る義　葉光
煙突ぱ半分折れたまゝ平和　豆秋
新雪が光つたフジの円く明け　翩骨
歌麿がはんらんしてる平和の陽　鮎美

兼題「インテリ」　北川春巣選

金儲け下手でインテリ痩せてゐる　葉光
インテリー洋書を派手に濶歩車　修三
インテリの仲間衛語で話すなり　梅志
安定所インテリ群へそつけなし　正司
診察室インテリらしい背なが見え　迷宮
虚栄だけ強くインテリ嫁き遅れ　鉄兒
名曲へインテリらしく眼を閉じる　水客
大学を出たのに養子でおさまる氣　翩骨
インテリーやつぱり易をみてもらい　壽安
正確にカレイドライスという男　古方
インテリの卵で宝くじを買り　正則
労組にインテリが居てまとまらず　正司
熱ばかり見るインテリの長い指　迷宮
インテリと云ふ自負だけに細う生き　生々庵
はいきんの事にインテリ触れたがり　文蝶
インテリのロイド眼鏡がよく似合い　淡舟
インテリへ読みたい本が買へぬ秋　豆秋
インテリの自負はチャンスを又逃し　正司
教養が廻りのくどい恋にする　修三
インテリの今にも落ちる棚ぶらり　正則
デツカンショ節がおはこの大学生　春巣

席題「古　本」　正本水客選

ごま塩に信用がある古本屋　梅志
古本の上中下巻巾をとり　鮎美
漱石の初版へ本屋座を正し　春巣
疎開した古本繩をかけたまゝ　白柳子
古本へレターはさんで旅に出た　義次
古本を日向に干してびろい溜み　鮎美
馬券はさんだまま古本貸して呉れ　万滴
大掃除書齋は妻の愚痴の種　修三
譲られた本を譲つて卒業す　同
鏡台へ古本乘せたまゝに雲　青丹子
旅のつれづれ古本も漁つて見　愛論
古本のしまいに一句書いてある　梅志
この味が古本あさり止めさせず　生々庵
古書即賣君のめがれをしたしろね　鮎美
古本の紙質の好さを買うて來る　春巣
古傷に似て古本をいとしがり　生々庵
古本を棚からぬけば倒けかゝり　鮎美
古書積んで襖を開けることを決め　水客

席題「提　灯」　橋本緑雨選

提灯の灯に足元を確かめる　葉平
珍客を岐阜提灯の下へ呼び　迷宮
提灯を貸したまんまを忘れられ　梅志
提灯の骨太く見へ村祭り　夏六
提灯を持つて山家のもらい風呂　白柳子
お祭の提灯少し酔つて來る　青丹子
提灯に送られてくる五荷のかさ　葉平
提灯の下で付け文そつと読み　淡舟
提灯の下でほつれ毛なでつける　同
背いた娘母の提灯に迎へられ　文雄
提灯のほこりを拂ふ日出度い日　豆秋
大提灯二度目は家をまちがえず　古方
提灯はつけずに火事場まで走り　豆秋
落籍されて提灯下げる店を張り　修三
提灯は仲間外れのように点き　鮎美
提灯は嫁の里まで急な用　緑雨

席題「車　掌」　清水白柳子選

子を降す車掌へ親は礼を言い　義次
車掌ちと氣嫌の悪い勤務振り　淡舟
投キッスよろしく車掌遠ざかる　籐彦
年とつた車掌に所きいてみる　梅志
親切な車掌話題の人となり　旅風
頑で乘る相手へ車掌ことづける　古方
ケーブルの車掌呑氣なように見え　葉平
車掌さんきたないのから釣に出し　豆秋
空つぽになつて車掌は紅を塗り　同
定期の娘みんな知つてる車掌なり　志津
女車掌の訛りをなつかしく聞く支線　青丹子
煙草もみ消して乘務へ立つ車掌　万滴
濶員へ車掌の場所をあけてやり　梅志
五千円の靴がはきたい車掌さん　鮎美
無事乘務終へた車掌へ山暮れる　万滴
発車ベル車掌は何か言い残し　文蝶
沿線の秋に車掌は疲れきり　同
峠茶屋車掌も水を呑みに降り　青丹子
株の騰つた話を車掌聞いて居る　水客
長男は大学ですと車掌云い　葉平
終点へ着くまで車掌絡まれる　正司
軽妙な車掌で今日は救はれる　旅風
喧騒の中に車掌もロマン追ふ　愛論
濶員は車掌の肩の塵見つめ　迷宮
車掌名雅号でなどは書いてなし　白柳子

版田阪寫謄

二五町田芝区北市阪大

会商阪田　株式会社

番九三六一　島福　話電

雑川　大阪南支部句會（大阪）
十月二十二日　於　王子神社

川雜美作支部創立記念川柳大會　於弓削小学校講堂

昭和廿四年十月九日正午開催

自惚れ・菊・指紋・無口・宿直　水客
自惚れが活字になつたさわがしさ　竹莊
おだてゝもあかんさやはり自惚れる　水客
自惚れの枕の下で虫が鳴き　竹莊
自惚れがそのまゝ通る齢となり　万滴
自惚れさしてお女將の如才なし　竹莊
それ程でないと長あご撫でてゐる　野介
自惚へ明日／＼と樂しませ　文蝶
自惚れは近頃ステツキついてゐる　里十九
約束の菊活けてやる枕元　更生
けんがいを置く玄關へ子をよせず　鮎美
菊貸めにかゞめば背に陽がぬく　万滴
駒上駄の將軍菊に魅入るのみ　亞鈍
菊の香に猫も綺麗な目で眺め　春柳

（写眞説明前列向つて右より）七面山、冨至、淑郎、風來子、八歩、久米雄、路郎師、弓削平、那岐坊、白鳳、祝平、呑狂、潤年、鉄兒、（二列目）寧々、奈々余角、照子、湖月、久米女、茶々、喜宝亭、娯句樂、師星、正一、呑峯、菁紅、日出雄、白柳子、（三列目）笑兒、不老笑泉、明坊、幻火、守、北星、一歩、吉備平、閑、凡太郎、のぶを、正中、柳王（四列目）秀鶴、香風、一砂、九二坊、至孝、朗笑、柳、驛人、凡樂、一男、柳泉、ひろし、高良、（五列目）凡々、牛歩、劍峯、正之の諸氏

◎句報は次号掲載

はびこつて來るは名も唯の菊　万樂
税金は養子に委せ菊いぢる　同
遍路行野菊の道は未だつきず　正司
引越へ底の小菊が忘れられ　青丹子
堂々の体軀で野菊好きと言ふ　葉光
菊の香がまだ手にのこる花鋏　竹莊
代議士の指紋もとつておきなさい　豆秋
金杯は指紋もふいて仕舞われる　古方
煙草ケース僕の指紋がまだ殘り　万樂
新築の壁についてる子の指紋　青丹子
張出しの習字の隅にある指紋　万滴
藥瓶指紋を殘し退院し　文蝶
參考にとられる指紋氣味惡し　種美
ヨーカンの指紋をそつと拭いて置き　角嵐
問題の指紋と蜘蛛は知らぬなり　小松園
四五人の指紋で貧める九谷燒　万樂
電球の指紋拭かせて秋を病む　角嵐
原稿紙バタの指紋がついたまゝ　古方
宝物の指紋を取りに長廊下　鮎笑
年頃の無口へ母は氣をつかい　柳笑
御主人の無口も里へ自慢をし　晴峯
紅燈に育ち無口な人にほれ　剛王
無口また墨の髭をむしり出し　更生
散歩からお茶へ無口のそれでよし　正司
その中の無口へ妓もてあまし　亞鈍
父に似た無口をいつそ親しまれ　青丹子
ネクタイも地味な無口の養子也　鮎美
貫錄は無口のまゝで恐れられ　青丹子
終戰後いつか無口な人となり　晴峯
激情をどこかに秘めてゐる無口　亞鈍
宿直へえらいこつちやと女房くる　鮎美
小使のなやみ宿直さいてやり　古方
宿直は手紙をひとつ書いて寢る　水客
ほんとうの宿直だつかと念を押し　野介
封筒の米で宿直朝を炊き　角嵐
宿直の何ぞ食ふものないかいな　種美
宿直の神經ＤＤＴを撒き　同
宿直は表紙ちぎれた本を讀み　葉光
あの部屋が宿直らしい窓があり　剛王
宿直へ黄色い声が聞えて來　里十九
宿直へ釣瓶落しの日がわびし　種美
たまさかの宿直しみじみ自己を見る　野介

雜川　東京支部句會（東京）

九月二十四日　於島野寮

初恋・夜汽車・笑顔・洗濯・酒

初恋に破れし頃の清らかさ　東夢
便箋を買ふに初恋ひまが要り　不二
すれちがつただけでうれしい初な恋　好郎
初恋の相手今ではあほらしい　ひろし
初恋のキッスやらはまだ出來ず　不二
初恋も知らず妻となり母となり　東夢
初恋の人に静かに会へる年　白星
後尾燈これが分れとならうとは　登志
もてた話ふられた話夜の汽車　ひろし
集金へ夜汽車夜汽車のプラン立て　好郎
夜の汽車だまされそうな女居る　白星
山が飛び灯が飛び母へ急ぐ汽車　同
今行くは下町らしい灯の乱れ　高志
一人乗り一人が降りた夜の汽車　好郎
夜の汽車何処へ着いたか虫の声　同
よい事ならなのに夜汽車へ荷をまとめ　不二
給料日女房笑顔で送つて來　登志
七〇年の過去を笑つて旅立ちぬ　東夢
黒枠の笑顔淋しいものにする　白星
商賣に使ふ笑顔を別に持ち　同
ほんとうの笑顔になつたチップ代　好郎
ワイシャツがかわかぬうちみえ奴家にいる　守夫
洗濯の間の守もしてくれず　不二
洗濯の間も離れかれるか新夫婦　東夢
洗濯で藝者の名刺流される　ひろし
人知れず洗濯に出すシャツの紅　高志
万國旗ほどにおむつを干してあり　守夫
洗濯の母へ宿題聞きに來る　不二
花も生け洗濯もして彼女去に　好郎
洗濯が土産でもうれしい子の帰省　守夫
酒呑みは嫌いと言ふて惚れてゐる　白星
酒の上の事にはしても彼奴めが　東夢
商賣氣はなれ女給の止める酒　白星
酔へば彼元少將を忘れかれ　好郎

雜川

姫路支部創立記念句會（兵庫縣）

十月十一日　於　樹市居　狩野燕子報

二次会・出迎・連れ・煙・募金・おつり

二次会の酒がいわすかゐらもがり　二葉
二次会の果て寐犯にひつかゝり　揚市
他所の宴開えて二次会やるにゃめ　和水
二次会は腹心ばかり寄つて飲み　燕子
二次会へ行かれば話まとまらず　笑鬼
二次会になつて眞相さかされる　一笑
二次会にあいつ一人が失敬し　路郎
出迎への母のびあがりのび上り　笑鬼
出迎へあるので二等車にしとき　揚市
出迎へに鞄を一つたすけられ　一笑
先輩に異性のつれをあやまれ　二葉
連れて來て勝手なこと邪魔にされ　一笑
旅行調れしてもやつぱり欲しい連れ　凡夫
母親を連れて孝行されて見る　同
連れの人誰たつたのとすれてみる　笑鬼
同席の情も嬉しい一人旅　燕子
ごみを焼く煙廊ゝ家に入り　二葉
炭焼きの煙一本山にのび　和水

火葬場の煙見ながら市電待つ　一笑
あの煙今日はお風呂があるらしい　笑鬼
復興の町忙しく煙はくり　凡夫
狸ほどくすべてバスの発車せず　一笑
煙たつとこから秋の暮れて行き　同
赤募金去年の疑問殘しつゝ　凡夫
みすぼらしい人が募金の羽根をつけ　燕子
慈善とは思へぬ町の赤い羽根　孤笑
ハンサムボーイレッドフェザーのよく似合ひ　樹市
駅前をまともに歩く赤い羽根　和水
名物のみやげ説明つきで出し　樹市
つり銭をくれゝばもう氣でわたし　同
窓口のおつり切手にして貰ひ　揚市
おつりなんかいらんとカフエー出にげれば　燕子
おつり出す程子も大きくなりました　同
つり銭を取らないみえがはらだたし　凡夫
音のするおつりもらへばじやまになり　和水
つり銭かないじやもう一つ買つて置け　一笑

雜川

出雲支部句會（出雲市）

十月二十日　於　桐山居　綠之助報

耐乏・幸福・國訛・酒

インクの臭さ幸福な日がつゞき　八雲
貧乏ばしても我が子に取りまかれ　賢藏
國訛りところ〳〵の味があり　一如
汽車の旅訛を聞いて讓る席　神門兒
十二ぶん情のうつゝた國訛　孝子
成金よ幸福までは買えないぞ　吉郎
一家みな笑ひの中の幸堀りや　さわだ
國訛り遙々來つることを知る　白鳳
幸福な老後で愚痴の多いこと　綠之助
呑めばもう何を憚かる國訛り　同

雜川

竹原支部句會（廣島縣）

九月十日　於　葉留路居　弘津柳慶報

折詰・新聞・秋

折詰を持たせ眞直ぐ去になはれ　芳泉
三行のいゝ條件へふと釣られ　同
掌ほどの庭にも秋の忍び寄り　同
折詰へ見向もしない不貞寢する　芳郎
壞新聞俺の云ひたい事ばかり　同
折詰を前に式辭の長いこと　葉留路
新聞をさがせば子供の服の型　松本
折詰は降つた形でさげられる　可笑
折詰を開けば妻は値ぶみする　柳慶

折詰にめでたく鯛のそりかへり　同
折詰をそのまゝ包む子供由　愛鳩
病窓を訪ふ虫秋を教えたり　同

雜川

大牟田支部句會（大牟田）

十月　於　三池柴料保安課　富田一葉報

相手の女・喰違ひ・代理

相手の女は姉の樣さとし　和惠子
相手の女子供がもう五人　枯柳
リニールに市民の意見喰違ひ　抱邊
仲裁が聞く度話喰違ひ　和惠子
皮算用叔父の遺産はこれつぽち　枯柳
断腸に過つて鉱山あはて出し　治
隱居する予定は終戰から狂ひ　岡
仲人の代理でばあちやん來て貰ひ　抱邊
抽籤へ代理背の子が明当てる　一葉
七光り親の代理で坐る席　枯柳
配給米男が取りに來て哀れ　同
代理した男があんな隅の椅子　和惠子
日曜は鍵を預ける若夫婦　枯柳
家族湯に幸福過ぎる若夫婦　抱邊

不朽洞會から

▼戸倉普天氏（兵庫縣）は十一月三日郷里沼貫の村長に就任された。ヤイノ〳〵口說き落された椅子にしても悪い氣もすまいと思う。遙に乾杯をおくる。▼佐野卜占氏（八代市）は日下八代觀光協会設立に大童であるが十一月上旬には発会式を挙げられるとのこと。▼高島米峰先生が肝臟農症で十月二十五日午前一時十四分東京都北多摩郡三鷹町北野六八三の自邸で永眠された謹んで悼む。▼狩野燕子氏（姫路市）は週末旅行で伊勢志摩へ遊ばれ「やはり伊勢神々しさ」杉並木一の句を二見から寄せられた。▼在間小樓氏は新居渓局区内若水町若水莊内に移られた。▼宮田不二氏（東京都）は港区芝公園五号地十の日本ディーゼルインヂエクション株式会社に入社された。▼橋本綠雨氏の厳父が十一月十三日八十五歳の高齢で郷里石川縣石川郡安原村字打木で永眠された謹悼。▼夷一笑氏（姫路市）は二階町通りへ營業所を開かれた。▼麻生路郎主幹は十一月五日午後二時から大阪図書館で開催された文藝賞藝術賞受賞者ゝ府知事府教育委員等による文藝家懇話会に出席された。

新会員紹介

十一月

石岡正司（兵庫縣）正　鈴美氏推薦
十二月
西森花村（大阪市）正　香林氏推薦
河村日潟子（鳥取市）正　鉄洲氏推薦

市岡曉舟（ハワイ）維　快夢起氏推薦

一動靜

▼本社十一月の例会は本社の文化祭として「作句と話の会」を五日午後六時から大宝文化会館で開催した。▼大阪遊信病院川柳会は十一月十二日午後二時から図書室で開催。▼大阪市教育委員会と各社共催の市民川柳大会は十一月十三日午后一時から大丸水曜クラブに於て本社中島生々庵氏の開会の辞によつて開幕された。▼南海鉄道川柳会は十一月十六日午前九時難波発で孝子観音へ吟行▼川雜大阪南支部では十一月二十日紅葉の笠置吟行とすき焼の会を笠置の亜鈍居で開催した。▼南区医師会文化部川柳会は十一月二十二日午後七時から大宝文化会館二階で開催、以上何れも路郎主幹出席。▼川雜北大阪支部は十一月十二日午後五時半から阪急十三保線宿直室で開催。▼川雜東京支部は十月十五日に鳥野寮に於て開催山雨楼氏から天位に短册を贈られた。▼川雜岡山支部と川雜美作支部が風來子、七面山、満年氏等の提案で鏡吟会を催すことになつたと▼交通局文化部川柳会の文化祭参加秋季川柳大会が十一月二十日午后一時交通局で開催▼堺市民川柳大会が十一月二十日午后一時堺市高須神社で開催本社から中島生々庵博士出席▼やぢかり吟社結成記念川柳大会（金沢市）が十一月十日午后六時半香林坊の香林堂で開催▼六文錢川柳社（上田市）では十一月六日に星蓮寺に於て創立卅五周年記念大会を開催▼川柳甘茶クラブ（金沢市）三周年記念川柳大会が十一月三日午後六時から小橋お多福横齊田方で開催▼西川青美氏（兵庫縣）は十月から御影町の焼跡に新築された青美居に移られたとのこと▼藤本万年氏（岡山縣）は十二月一日から刊行される「夕刊山陽」の編輯長に就任された。▼大川辰三氏（大阪市）は長い疎開生活から住吉区西長居町一六三へ移られた。▼遠山夏生氏（八代市）は肥後銀行八代支店長に昇格せられた▼山本葉光氏（大阪市）は塊人氏の「仮名づかひその他」同感です。今では頂の文字か、日本銀行券か、川雜の横書きだけに右書が殘る事になつたと添えたいです——との批評を寄せられた▼松盛琴子氏（東京都）が十月廿八日午後四時十五分腦溢血のために亡くなられた謹んでお悼みする▼早川聰松氏（尼崎市）が十月廿四日永眠された旨芳未亡人から通知があつた。謹悼

編輯室にて

▼出版界不況の中にあつて、ひとり本誌が大好評のうちに、十二月号を世に送ることが出來たことは愛読者諸君並びに寄稿家諸氏の熱誠なる御支柱のたまものだと思う。社として一番大きな仕事は朝日新聞社後援の下にあやめ池で開催した全國川柳大会であつた。これは不朽洞会が支柱となつて絶大な美果をおさめたのであつたその他大小幾多の句会も滑めらかに進展したことはうれしい極みである▼本号は印刷を早める関係上、少しく減ページした。そうしなければ編輯が遅れるからである。その代り新年号で埋め合せ、それだけ新年号を賑やかにすることとした。諒とされたい。▼まだその上に新年号ではよろこんでいただける企劃をしたが、これはまあ、新年号でのお楽しみにしておこう。▼本誌の力強い編輯と俟つて、続々と良い原稿があつまり、ページ数が足らぬので編輯局ではうれしい悲鳴をあげている、お蔭で拙稿など発表する余地がない。しかし近い將來には必ずこれが打解策を講ずるつもりだ。▼戸田古方氏の原稿も連続五回ものが読切原稿の形をとられたので、宇井無愁氏から横槍がはいり、それに対する應酬があつたが誌面の都合上次号に発表することにした。▼前田伍健氏其の他の方々の寄稿が何れも次号以下へ割愛したおゆるしを乞う▼健康を害して一ヶ月以上になりますが、その間、完全に寢ていられたのは二日宛二回に過ぎなかつた。病軀を押して、会合に出て、何かを喋べりまくつている始末、しかし、もう大分いゝ方であるから御放念ありたい。▼本誌の夜を日につぐ努力は読者も殖え、不朽洞会の会員も殖え、支部も段々増加の傾向にある。文化國家に一川柳雜誌」ありと誇れるだけのものにしたい念願に燃えている。会員になりたい方、支部を新設したい方は、此の際それぞれの係まで申込んでいただきたい。

（路）

食品衛生法検査合格品
蜂印
砂糖なくとも……
カリチン錠
最も合理的な…サツカリン・ヂルチン混合錠
大阪 東洋製薬化成株式会社 道修町

社の黑板

官公廳、会社、商店、工場等あらゆる團体の慰安会其他でSZ軽音樂團の出張演奏御希望の方は弊社サービスへお申込み下さい。

○

難波連絡所で十二月十日（土）の午後二時から四時まで短冊を書く稽古の会を開くことにしたところが大変人氣を呼んでいる。

○

連絡所で川柳の個人教授をやつて欲しいと云う要望があるので、れこも開始したいと思つている。

希望者が寄つてカンタンな規定を作つたらと思う。意見を漏らされたい。

シマズに ヨクキク
大學日薬
結膜炎
トラホーム
つかれ目
15cc 正價¥30
全天堂製藥

趣味と教養の殿堂
松坂文化クラブ
會員募集
科目
華道（小原流・宋生流）
茶道（表千家流・宗徧流・花月庵流）
洋裁・書道・日本舞
箏曲・聲樂
手藝・古典・新舞踊
長唄・小唄・謠曲
服飾デザイン
詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ
松坂屋
大阪日本橋
電南一一七一番

募集

課題吟募集

母（十句）奥村丹路選（一月五日締切）

夫婦（十句）大森風來子選（二月五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雜詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雜詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出來る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Made in Occupied Japan

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雜誌 第四卷 第十一号

一冊 金三〇円（送料三円）

半ケ年概算 金一九八円

一ケ年概算 金三九六円

昭和廿四年十一月廿五日印刷

昭和廿四年十二月一日発行

（載轉禁）

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

発行所 川柳雜誌社

振替口座 大阪 七五〇五〇